健保九太郎　　INDEX

（平和を願って）
銃とチャールトン・ヘストン（2014．10）
（ワンダフルライフ）
日々是好日（2018．5）
（子育ち、親育ち）
元気で　仲良く　しっかりと（2016.2）
（読んだ見た聞いた）
ジョージ君流　東海林さだお論（2014．12）
（エッセイさまざま）
初夢にちなんで（2015．1）
ステレオタイプ（2015.8）
伴侶の呼び方（2016.3）
伴侶の呼び方―その２（2016.7）
私の失語症（2017.8）
わが「アルコール一中毒」闘病記（2018.3）
わが「哲学の道」ものがたり（2018.9）

（平和を願って）

銃とチャールトン・ヘストン（2014．10）

健保九太郎　　（美賀多台）

もう何年か前、老いた名優チャールトン・ヘストンが、ライフル銃を片手に高くかかげて何やら吠えている写真を見て、衝撃を受けたことがある。当時、異常者が高校で機関銃を乱射して多数の学生を殺害し、全米を凍りつかせた悲惨な事件があった。当然のことながら、銃の自由販売を規制すべきだとの議論が沸き起こったとき、全米ライフル協会の会長をつとめていたヘストンが仁王立ちしてこれに反対したのである。

私は、チャールトン・ヘストンの大ファンであった。「十戒」「ベンハー」「大いなる西部」「地上最大のショウ」「猿の惑星」「エルシド」等々、彼の映画の大部分を見ている。歴史上の英雄を演じて、彼ほどしびれさせる名優はいなかった。渋みのある彫の深い顔に怒りや悲しみを込めた表情、男が見てもほれぼれする肉体美、どれも素晴らしかった。

その彼が、銃の規制に「体を張って」反対したのである。ヘストンは「私から銃を取り上げるなら私を殺せ」と過激な演説をして、さすがに人々の反感を買ったという。彼の信条を知り、私はかなりがっかりした。憧れの英雄が私の中で色あせてしまった。

「不法な悪が銃で家庭や社会を脅かしている限り、私たちは対抗する銃で守らなければならない。これを規制するなどとんでもない」という考えは、「銃には銃を」の思想である。

この論理こそ、「軍備には軍備を」、「軍拡には軍拡を」という軍事思想に他ならない。今どこかの国で進められようとしている軍備増強政策である。

ハリウッドスターの中でも、「ローマの休日」「アラバマ物語」のグレコリー・ペックはハト派で、銃規制を強く求めたという。エライ！さすが、噂に違わぬ知的二枚目俳優！

家内　　相手の国がどうであれ、軍拡政策は平和にとってよくないと言いたいのね。でも、説得力が今いちだわ。

私　　アチャー・・・、ご尤も。面目ない。どなたか、しっかりした平和論を教えてクダサーイ！！

（ワンダフルライフ）

日々是好日（2018. 5）

健保九太郎　　（美賀多台）

　ハナミズキが一段ときれいに咲いた。
　わが家にはもともとあまり上等の樹がないうえに、ろくに手入れもしていないので、庭木はどれも頼りない。その中でも、どういうわけか、ハナミズキだけは毎年すき間がないくらいにたくさん純白の花をつけてくれる。桜が終わるころに咲き始めるこの花の白さはまことに絶品で、日に日にあたたかくなるこの季節、気分を一層浮き立たせてくれる。

　浮き立つといえば、街頭にあふれ始めたツツジも大好きだ。この花も今年はいつもより盛りが早く来そうな気配である。上品という種ではないかもしれないが、色とりどりに咲き乱れる華麗さは圧巻というべきであろう。今日は、散歩の帰り道に、思わず一輪だけ折り取り、机に飾らせてもらった。桜もいいけど、明るい陽射しの中で豪華に咲き誇るツツジ、私には春の王者のように思える。

　さらに春の便り、今年も四国の知人からタケノコを送ってもらった。7本も入っていて、二人きりの熟年夫婦（老夫婦ではない！）の家庭にはやや持てあまし気味であったが、近所のKさんがご夫婦ともタケノコが大好きと聞いて、もらっていただいた。ほっとしていると、Kさんがそのお礼にと、農業公園で買ったという可憐な山野草を二鉢持ってきてくれた。ピンクと白の小さな花のナントとまあかわいらしいこと。素敵なものを届けてくれたKさんのセンスに感心することしきり。心がまたはずんだ。

　来週は、カミさんと二人、山菜採りのバスツアーが楽しみであり、連休の一日は、山歩きの友人に誘われて京都の裏山にハイキングにでかける。

　今年の春は、いつになく、自然の美しさと恵みにしあわせを感じることが多い。
　一年一年、庭木はもとより街かどの樹木、路傍の草花、山野の輝き、それらの盛りを楽しみ、移ろいを惜しむ心を持ちつづけたい。
　そして、ともに喜べる家族や友人たちを大切にしたいと思う。（4/23記）

（子育ち、親育ち）

元気に　仲よく　しっかりと（2016. 2）

健保九太郎　（美賀多台）

「元気に　仲よく　しっかりと」は、私が生まれ育った四国の小学校の講堂にかかげられた標語であった。なぜか、このごろしきりにこの言葉を思い出す。

そういえば、竹馬の友ら数人とは今もつきあっている。年に1，2回集まっては呑んでいるのだ。往年のマドンナもいて、けっこう楽しい。名付けて「仲よし会」という。古希を過ぎたおじいちゃん、おばあちゃんが「仲よし会」もあるまい、と笑わないでほしい。みんなこの名前が気に入っているのだ。

孫のうち2人がこの4月小学校に上がる。なにかお祝いのメッセージをと考えているうちに、「ともだちをたくさんつくって、なかよくあそんでね」ではどうかと思いついた。

「あそんでね」は、小学校へ上がる前から「くもん」だの「ピアノ」だの、やたらと「教育」しているパパとママ（私の息子、娘）に対する牽制であり、のびのび教育派たる「じいじ」のはかないレジスタンスなのである。孫にはわかるまいが、息子や娘は苦い顔をするかもしれない。

「あそぶ」はともかく、「仲よく」は、今も子どもたちへの教育メッセージになっているのかと心配になってきた。

私は、「がんばって」より、「しっかりと」よりも、「仲よく」が圧倒的にすきだ。これからの社会を築くうえで（正確には再生するうえで）、何よりも大切なキーワードだと思う。むつかしいことかもしれない。私自身、そうした心のありようが身についてきたとは思えない。むしろ反対に、競争や争いに心を奪われることが多く、心のやすらぐときが少なかった。

人生、ちょっぴり損をした気がするのだ。

平和のためにも「仲よく」は一番大切な心かまえではないだろうか。ただし、いけずのアベちゃんを除いてだけどね。

（読んだ見た聞いた）

ショージ君流　東海林さだお論（2014.12）

健保九太郎　（美賀多台）

ものごとには表と裏がある。
日本列島にも表と裏がある（今は裏と言ってはいけない、日本海側）
私の読書生活にも表と裏がある。

裏と言っても、将来文化勲章をもらう時に差し障るほどのたいした裏ではない（誰が！）。
表の顔は、純文学好きである。村上春樹なんか沢山読んだし、あと、エート、エート、大江の健ちゃんだって、たまには・・・（声が小さい！）
話変わって（急に変えるな！）、裏の顔となると、東海林さだおの漫画とエッセイのファンなのです。

　私は、ここ十数年、毎日毎日、東海林さだおを読んできた（漫画も「読む」でいいかな？）。寝る前に布団の中で読んできたのである。これを読まないと寝付けなくなってしまった。繰り返し繰り返し読む文庫本はボロボロである。それほど東海林さだおにハマッテしまったのだ。

なぜに我はかくも東海林さだおに魅せられしか（オッ、オッ、文語調！）
面白いからです、楽しい気分になるからです。心がほっとするからです。
男は外に7人の敵あり、内に怖いカミさんあり（ゴメンネ、冗談だよ）。緊張に次ぐ緊張の毎日。やっとフロで気分をほぐし、蒲団に入ってようやくの解放感。ここに東海林さんの本があれば、これ以上の極楽はないのです。
信仰厚きクリスチャンなら、静かにお祈りをして、聖書の1ページも読み、安らかに眠るのでしょうね。
私も、本来なら、せめてパスカルの「パンセ」とか、ヒルティの「眠られぬ夜のために」なんかをひもときながら、気高く眠りにつきたかったのですが・・・。

実は、東海林さんは人間観察の天才です。人間に対するやさしいまなざしにおいて仏様にも匹敵する人なのです。

その人の漫画とエッセイを読むのがどうして悪いのか！　責任者出てこい！（ドン！ドン！　机をたたく音）（誰も悪いなんて言っていないよ）。

人は、世間を渡るとき、どうしても構えてしまう。負けまいとする。建前でしゃべる。ええ恰好をする。これは避けられない本能のようなものでしょうね。自然体で生きたいと思っても、なかなかできないのが人の常。疲れてしまう。
東海林さんの漫画とエッセイの世界は、ありのままの人間、本音の人間、格好をつけてもすぐにボロがでるダメな人間、嫉妬深い人間、ケチで欲張りでスケベ、そんな人物ばかり。そうした弱いあさましき人間に対する温かいまなざし、限りないやさしさ、おおらかな包容力。弱さや醜さを包み込んで、人の世が愛おしくなるのです。
そんな作品を若い時から創作し続けた東海林さだおという人は、とてつもない天才のような気がしてならない。

東海林本については、私は、漫画なら「新　漫画文学全集」「ショージ君」（いずれもちくま文庫）「漫画文学全集」（文春文庫）など、エッセイなら「ショージ君のにっぽん拝見」「ショージ君のぐうたら旅行」「ショージ君の青春期」など（いずれも文春文庫）昭和50から60年代に出た一連の「ショージ君」ものが傑作だと思っています。

（エッセイさまざま）

初夢にちなんで（2015.1）

健保九太郎　（美賀多台）

円朝作といわれる落語「芝浜」は楽しい人情話である。夢が出てくる。

大金を拾った主人公がこれを女房に預け、嬉しさの余り大酒を飲んで寝てしまう。翌朝、女房に「あの金は？」と尋ねると、「何の話？、夢でも見たんじゃないの？」と言われて、話は大転換。

「夢かうつつか」。実は、最近、私もそんな経験をするようになった。あぶない兆候である（でも、まだほんの少しだよ）。たとえば、起床してからも、しばらく夢心地が続き、ある人に不義理をしたままの後ろめたさが胸に引っかかっている。お日様が高く上るころ、ああ夢だったのだと、ようやく心が落ち着く。これが女性の絡む心躍る夢の続きなら歓迎もしようが（カミさんゴメンネ！冗談だよ）、そんなムシのいい夢は見ない。たいがいは、借金か、仕事の失敗か、不義理か、ろくなことではない。実人生の反映だとすれば、改善のしようもない。

古希を迎えたこの年になって、まだうなされ続ける一連の夢がある。一つは受験勉強にからむ「受験ものシリーズ」、もう一つは「仕事できないシリーズ」である。

「受験ものシリーズ」は、試験日が刻々と近づいているのに、勉強がほとんど進んでいない最悪の状態。私は理数系が嫌いで苦手としていた。数Ⅲは試験科目でなかったはずなのに、なぜかこれが夢の中で、私を責め続けるのである。1か月前になっても、問題集の1頁もやれていない。よくよく見ると、教科書さえ理解できていない。「タスケテくれー！！」。

「仕事できないシリーズ」はなお悲惨である。上司から期限が定められてレポートを提出するよう言われている。その期限は明日なのに、1行も書けていない。どう言って弁解しようか、そればかり頭をひねっている。「そうかこれは夢なんだ」と調子のいい「夢」で誤魔化そうとすることも・・・。寝汗びっしょり。「タスケテくれー！！」。

初夢くらいはいい夢を見たいもの。「憲法9条にノーベル平和賞」とか、「政府、集団的自衛権容認決議を撤回」などのね。

ステレオタイプ（2015.8）

健保九太郎　（美賀多台）

　お久しぶりです。真面目なエッセイばかりなので遠慮していました。でも、こんな時期こそ、笑いも必要かなと思い、出てまいりました。

　世の中にステレオタイプが増えてきているように思います。よくないですね。
自分の頭で考え、自分の言葉でしゃべりたいものです。

　うちのカミさんは大変マジメな人ですが、ときどき面白いことを言います。先日も夕飯のときに、
「 今日、パン屋さんに寄って、食パンを買ったらね。 店員さん、何と言ったと思う？　＜ここでお召し上がりですか？＞だって！」
「 ここで食パンかじるわけネーダロ、バーロ！って、言いたかったわ 」
ありそうな話です。

　桂文珍の小話にもこんなのがあります。
文珍の年老いたお母さんが、久しぶりに街に買い物にでたとき、たまたま尿意をもよして困った。お母さんは、近所のハンバーガーショップを見つけて、「 トイレを貸してください 」とお願いした。すると、店員さんが「 大ですか、小ですか？ 」　・・・　・・・

　ステレオタイプはいけません。品よく生きるためにも。

伴侶の呼び方（2016.3）

健保九太郎　（美賀多台）

　伴侶をどう呼ぶか。わが人生さいだいの難問である。

　ふだんは「家内」と呼んでいる。「ぼくの家内がね」というふうに。
　しかし、私も、いっぱしの教養と知性とじんけん感覚を身につけた人間である。「家内」という言葉がいかに封建的で、おとこ中心主義で、女性を家庭にとじこめる古い考えから生じているか、その辺のことは十分に分かっている。分かってはいるが、ついこう使ってしまう。

　あるべき呼び名は「妻」であろう。しかし、照れちゃうんだな。

「ぼくのツ、ツ、ツ、ツマがね」と、どもってしまう。唇がふるえ、のどがかわき、胃がいたくなるのだ。「家内のことだけどね」と、いらぬ注釈を加えたりする。
親友Hさんなどは、夫妻がそれぞれ「ぼくの妻が」、「私の夫はね」と、自然、スムース、淡々粛々、よどみなく言っている。エライ！　尊敬している。

私もときどき「ぼくの女房」と言ったりする。でも、庶民的な感じはあるが、元をたどれば、清少納言のじだいにできたような、「大奥」の連想さえしてしまう、やはり男社会のことばに違いあるまい。
「山の神」というのも、尊敬しているようではあるが、尻にしかれているわが家の力関係をあまりに率直にいいすぎていて、ていこう感がある。

「家人」も悪くない。私の好きな東海林さだおさんのエッセイでは、奥さんのことをそう書いている。しかし、文章にはあうが、口に出すにはどうかな。
「配偶者」、だめ、今にも家庭裁判所につれていかれそう。
「ぼくのサイがね」、きざっぽい。大正時代の白樺派みたい。
「おかあさん」、論外。
「うちのカミさん」、いいね。親しみがある。大阪のおばちゃんの感じがあって、尊敬の念も込められている。ただ惜しむらくは、エプロンのイメージが強すぎる。

苦心に苦心のあげく、「姫」はどうだろうと思いついた。「わがヒメはね」と。
京都のお公家さんの家庭のようでいいではないか。ついでに、私のことを「わが君」と呼んでもらおう。
「ヒメ」と「キミ」、内裏さまのようなカップル誕生。
そのヒメとキミは、ときどき大喧嘩をする。
キミが「このドアホが！」と叫ぶと、ヒメは「なによ、オタンコナス！」とやり返す。
ひな壇から、内裏さまがズッコケて落ちてくるのであった。（おしまい）

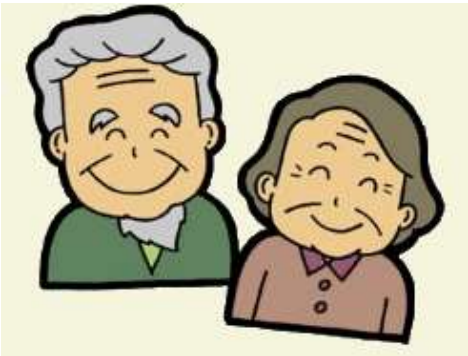
伴侶の呼び方・その2（2016.7）

健保九太郎　（美賀多台）

伴侶を面と向かってどう呼ぶか、これもなかなか大変な問題である。
普段は、「おかあさん」とよびかける。・・・はずかしい！！

若かりし頃、伴侶から「私はあなたのおかあさんじゃありません」と言われた。
そのとおり！　すごく納得！　わが伴侶のナント論理明快、頭脳明晰であることよ！
それでもこりずに「おかあさん」を繰り返していると、彼女もあきらめたようだ。

私の機嫌がよく、しかも、男女平等の人権意識が高揚しているときは、「あなた」と呼びかける。
「あなたの今日の予定は？」、ナンチャッテ。・・・はずかしい！！
これに対しては、わが伴侶もすごく機嫌よく応対してくれる。
「今日は、私がお昼おごるわ」、ナンチャッテ！！



「キミはどう思う？」なんていうときも。加山雄三みたい！

喧嘩をしているときはもちろん、「だいたい、おまえはね・・・」となる。
彼女も負けずに「なんよ、えらそうに。あんたこそ・・・」と返してくる。
「あなた」と「おまえ」、「あなた」と「あんた」、この違いは大きい。
まあ、あまり気持ちのいい対話にはならない。

わが尊敬する理想の夫婦Hさんとこは、お互いにどうよびあっているのだろうか。
やはり格調高く「あなた」、「ナーンダイ」だろうな。

　わが息子などは、結婚歴もかなり長いが、いまだに恋愛中のままに、「〇〇ちゃん」の愛称でよんでおり、お嫁さんも「△△くん」などと学生気分である。

　世代の差といってしまえばそれまでだが、人の世界は、その意識において、時代とともに、まっとうな方向に進んでいる、とも感じる。
　伴侶の呼び方ひとつにしても、人類の進歩を信じる今日この頃である。

私の失語症（2017.8）

美賀多台　　健保九太郎

　魯迅という中国の有名な作家は、晩年失語症にかかったという。
　井上ひさしの演劇「シャンハイムーン」を見て知った。
　劇中、親交のあった内山書店の内山完造と再会する場面。魯迅はいつも呼びかける「カンゾウさん！」の言葉が出てこない。「シンゾウさん！」「スイゾウさん！」「ジンゾウさん！」と臓器をすべてあげ、最後にようやく「ああ、カンゾウさんだ！」。名優のあわてふためいた演技がおかしかった。

　かくいう小生も、魯迅先生にならい、名誉ある失語症になったようである。

数日前、朝食にダイニングに入ったとき、いつものようにカミさんに「おはよう！」と声をかけようとした。ナント、そのとき出た言葉が「ただいま！」なのである。カミさんのけげんな顔に気がつき赤面した。

食事の前に、当然「いただきます！」をいうべきところを「ごちそうさん！」と言ってしまい、カミさんに「じろっ」とにらまれたこともある。うちのカミさんの「じろっ」は迫力があるのだ。そんな日に限って、出かけるとき「行ってきます！」の言葉の代わりに、またもや「いただきます！」と言ってしまう。カミさんの「じろっ」を見るのが怖く、うつむいて逃げるように家を出た。

まごうかたない失語症である。

人は、そんな立派な病名ではない、要するに「ボケ」であると言う。そうだろうか。小生は、一時的な病気かもしれない「失語症」と思いたいのだ。まあ、年も年だし、「ボケ」の一種であっても、かまわないのだけど・・・

こんないいこともある。カミさんと喧嘩したとき、若いころなら、当然、高射砲のように口をついて出た罵詈雑言の文句が出てこない。口をもぐもぐさせているうちに、「まあいいか」という気持ちになってくる。憤懣の情が自己憐憫の情に代わり、ことは丸く収まるのである。

わが「アルコール中毒」闘病記（2018.3）

美賀多台　　健保九太郎

正直に告白しよう。私はアルコール中毒にかかっている。

定年後9年になろうとする今、私は、少しばかりの仕事をつづけながら、多くの時間を隠居生活の楽しみに費やしている。そのゆとりの時間で、草の根の9条の会などのお手伝いをしているわけである。

いろいろ恥ずかしい思い出もあるが、わが人生、酒とのつきあいはまあまあ合格であったと思う。晩酌は、さほど多くはないけれど、結婚以来欠かしたことはない。幸い、アルコールが嫌いではないカミさんと二人、夕食時は晩酌を楽しんでいる。中国・北朝鮮問題をしゃべりあうこともあり、時に「論争」となることもあるが・・・。

その私が、仕事が何もない平日の昼間、しかも午前10時ころに、缶ビール1本を飲む癖がついてしまったのである。

もともと、私は、アルコールが少し入ると、顔がまっかになり、2，3時間はそれが続くという情けない酒のみであった。

私が朝のうちからビールを飲んで、当然気持ちよく音楽などを聴いていると、決まってある人が訪ねてきて、玄関のブザーを押すのである。
9条の会の信頼する仲間、時に激論を交わす喧嘩友だち、そして演劇鑑賞会リーダーの「たけし」さんである。
「こんどの鑑賞会は、いつにする？」
悪いときには悪いことが重なる。カミさんは用事でいない。私が赤い顔のまま出ざるをえないではないか。

できることなら「たけし」さんには、この赤い顔はみせたくない。ご自分もかなり「アルコールが過ぎること」に悩んでいるくせに、ひとに対しては、ヌケヌケと「昼間から酒飲んで！」と叱るからである。・・・くやしい！

そうした二人が、酒飲みの罪滅ぼしもあって、今、憲法9条を守り抜く大きな闘いに、最後のお手伝いができないものか、ない知恵を絞っている。

わが「哲学の道」ものがたり（2018.9）

健保九太郎　　（美賀多台）

昼さがり、私は散歩にでかける。西神中央駅の喫茶店で冷たいコーヒーを飲み、広場の景色を眺めた後、腰を上げ、ダイエーとハローワークの横を通って橋を渡り、木立の中の道をゴルフ練習場の方に向かう。ここを私は「哲学の道」と名づけている。もの思いと思索の道だからである。

どんな思索か、例をあげよう。
木立の道で急に小便がしたくなる。冷コーと水を飲みすぎたのだ。道はまっすぐである。私はキョロキョロと前後を見回し、木立の薄ぐらい一角で急いで用を足す。そのあともう一度あたりをうかがい人に見られなかったかどうかを確かめる。
ここから私の深い深いシサクが始まる。「本当に見られなかっただろうか」「立ちションベンは罪であろうか」「罪だとしたら幸せ追求権を保障した憲法に違反するものではないだろうか」
また別のギワクにもとらわれる。「あのキョロキョロはまずかった」「もし数時間前にN署の留置場からチカン犯人が逃走し警察が追跡していたとしたら、木立の中の防犯カメラは私の姿を映しとったにちがいない」「きっと今日の夜7時のNHKニュースに私のあやしげな挙動が流される！」・・・冷や汗たらたら、疑惑に満ちた思索と考察が続くのである。

まもなく、高塚公園の池につく。いつ見ても広くきれいで静かな水面、周りの雑木の濃厚な緑、青い空、浮かぶ雲・・・。乱れた心はいつしか遠のき、平穏が訪れる。柵の手前の石段に座り、またぼんやり時を過ごす。

それから、ゴルフ練習場の縁を歩いていると、年配の散歩女性とばったり。知り合いのKさんである。赤いTシャツを着て、背筋をまっすぐ伸ばして歩く姿の若々しいこと。笑顔で一言二言ことばを交わす。Kさんも私のことをきっと、背中は曲がっていかにも年寄りだけど、愁い顔の散歩姿を「素敵だわ」と思ってくれたに違いない。オシッコで心乱れたなごりであったことも知らないで。

西の空はきれいな夕焼けだ。俗物の老哲学者は、ここでもうっとりと空を眺め、「明日もがんばろう」と思うのであった。